

二〇一三年五月二〇日 開催

「街角でふれるコトバと社会」シリーズ 第一回——ヨーロッパ言語グループ

コムーネからみるイタリア社会とことば

——ヴェネツィアを事例に

飯田巳貴

■講演者……飯田巳貴(専修大学准教授)

■司会……林 史樹(本学アジア言語学科教授)

イタリアという国とその社会を理解しようとする時、手がかりとなるキーワードのひとつは、コムーネ(commune)であろう。コムーネは、英語の“community”の語源となった言葉で、歴史的には中世に北・中部イタリアで誕生した自治都市を指す。また現在でもイタリア共和国における行政単位であり、州(regione、全二〇州)、県(provincia、全一一〇県)の下部に置かれるが、全土で八〇〇〇以上あるコムーネの規模は実に多様である。最小のものでは人口数十人の村から、最大では二五〇万以上の人口を持つ首都ローマの様な大都市まで、全てコムーネである。各コムーネは自立性が高く、その背景には各々の自然環境や社会システム、そして歴史が反

映されている。グローバリゼーションが声高に言われた時期、イタリアの都市や小さな町(コムーネ)の衣食住にわたる多様な魅力が、それに対抗するかのように語られることもあった。このようにイタリアの魅力は大小の都市に息づく個性的な芸術や生活文化にあり、それ故にイタリアは「都市の国」と呼ばれることもある。では都市の国イタリアの多様性は、どのようにして生まれたのだろうか？

本稿ではまず現代のイタリア社会におけるコムーネの位置づけと、その歴史的な形成過程を中世に遡って概略する。次に、筆者がかつて留学した経験を持ち、現在も研究の対象としているヴェネツィアのなりたちを紹介し、今も街中に残る歴史の足跡を紹介する。

イタリア半島では、五世紀後半にローマ帝国の西半分が消滅して以来、約一四〇〇年にわたって一つの国家に統一され



講演する飯田先生と、豊田先生

ることはなかった。現在のイタリア共和国は、明治維新と同時代の一八六一年に原型が成立し、約一五〇年の歴史しか持たない。古代末期から近代にいたるまで、半島内には常に大小様々な複数の国家が存在したのである。こうしたイタリア半島の歴史は現代においても、各コミュニ社会の慣習、文化、言語など様々な形で見る事ができる。

イタリア人の帰属意識という点でこのコミュニネの持つ求心力は非常に大きく、「イタリア人」である前に、「ヴェネツィア人」、「ミラノ人」、「ローマ人」といった

意識が非常に強い。コミュニネの中心には広場に面した教会があり、その鐘楼（カンパニレ）が見える、鐘が聞こえる範囲にアイデンティティを持つ、カンパリニズモと呼ばれる狭隘な郷土愛もイタリア社会の特徴として挙げられよう。

イタリアの知人か

ら、「我々がイタリア人という自意識を持つのは、ワールドカップサッカーでイタリア代表を応援する時だけ」と、本気と冗談が半々のセリフを聞いたことがある。イタリアといえばサッカーでも有名だが、地元チームに対する熱愛ぶりは強烈である。試合時間、どの家の窓からも試合の中継音声と歓声（あるいは悲鳴）が聞こえ、街角のバルでは街頭テレビの前に常連が陣取る。町の中央広場にはパブリックビューイングが設けられ、試合が勝利に終わると、街に繰り出して大騒ぎである（もちろん、そうした騒ぎには一切無関心な住民もいる）。

さてイタリアのほとんどの都市は、一時中断などがあっても古代に起源を持つが、後述するヴェネツィアなど、中世期に新たに建設された都市も存在する。イタリア半島の北・中部で、十一世紀頃から都市を中心に住民の自治による共同体、つまりコミュニネが誕生した。その中でも有力なコミュニネが次第に周辺の小都市や農村地域（コンタード）を併合していわゆる都市国家を形成し、主に太商人層が支配する市民共同体（都市コミュニネ）となった。さらに中世後期には、広い領域を持つ領域国家にまで発展する場合もあった。十五世紀の北イタリアには、大小様々な国家が存在していた。各国家の政体（独裁政、寡頭政、共和政）や発展の経緯は様々であり、またそれぞれの国内では、もつと規模の小さいコミュニネが自立性の

高い社会を形成していたのである。

十六世紀に入ると、スペインとフランスの間でイタリア半島をめぐる「イタリア戦争」が勃発し、ナポリやミラノはスペインの支配下に入った。その後十八世紀末までイタリア半島の政治的枠組みに大きな変化はない。十九世紀前半のフランスやオーストリアの支配を経て、世紀半ば以降独立運動が高まり、世紀後半に徐々にイタリア王国への統一が進んだ。しかし統一国家になった現在でも、各コムーネの自立性は高い。

コムーネの独自性は、言語にも及ぶ。現代の標準イタリア語は、中世中期後記にフィレンツェなどを中心とするトスカーナ地方で使用された「俗語」が基になっているが、イタリア半島では方言が現代まで色濃く継承され、方言(地方語)辞書の出版も盛んである。筆者は、中世後期から近世にかけてヴェネツィア商人が作成した商業関係の史料を読む機会が多いが、こうした私文書は、いわゆる標準イタリア語の知識だけでは到底解読できないものが多い。

さて、アドリア海の深部、陸から数キロ離れたラグーナ(潟)に浮かぶ都市ヴェネツィアは、イタリアの大都市としては例外的に、古代ローマ期には存在しなかった都市である。この地域は多くの川が流れ込むため、潮の干満によって土地が出現するような水深の浅い潟が広がり、比較的固く高い土

地には別荘や小屋が建てられていた。四〇五世紀頃から、北方よりゲルマン系を中心とした人々がアドリア海深部の沿岸地帯にも姿を見せるようになり、近隣の住民は、これを恐れてラグーナに一時的な避難を繰り返した。

ラグーナは天然の要塞であった。全体的に水深が浅く、船が航行できる水路は限られる。

水路を示すためにプリコラと呼ばれる標識が立てられているが、敵が襲ってきた場合、これを抜いてしまえば、敵は座礁してしまう。さらに陸に上がると、ぬかるみに足を取られて先に進むことはできない。ヴェネツィアはこの方法で、戦わずして何度も敵を撃退し、一七九七年まで、約一〇〇〇年にわたる独立を維持したのである。

ラグーナに避難した人びとは、やがて自然の水路を生かし、比較的固くて高い土地に小島を埋立てて建設し、定住を開始した。埋め立ては海水下の固い粘土層の地層に一〇メートル以上の松材を隙間なく打ち込み、その上に土台石を置いて煉瓦を主体とする軽量の建物を建築した。小島の中心には小広場(campo)がひらけ、その周辺に教会や有力者の家が並ぶ。広場から伸びて海端に至る細い路地の両側には住宅がひしめいていた。

その後一〇〇以上の小島が四〇〇以上の橋でつながれ、水路は「運河」と呼ばれるようになった。現在のヴェネツィア

は魚の形をした大きな(といっても二キロ×四キロ程度)島を形成している。橋は小島同士をつなぐために後から無理にかけたので、斜めにねじれた形になっているものもあり、下の運河を船が航行できるように全て太鼓橋になっている。

ヴェネツィアでは面積に比較して教会が多い。これは、かつて各小島が独立した共同体で、各島々に教会があった名残りである。また他のイタリア都市と比較すると、社会階層の差による土地の住み分けが比較的小さいことも、小島の集合体だったことの名残りであろう。

ヴェネツィアに多い小広場は、他都市と違い、ピアッツァ(piazza)ではなくカンポ(campo)と呼ばれている。ヴェネツィアでは、ピアッツァは、都市の中心であるサン・マルコ広場(Piazza San Marco)のみに用いる。標準イタリア語では、カンポは一般に「畑」を意味するが、ヴェネツィアでは、都市の創成期に埋立て建設された各々の小島の中心にあった広場(空き地)をカンポと呼んでいた。小島が橋によって結ばれて現在の様な都市が形成された後も、地域の精神的中心としてカンポの場所と名称が残された。

ヴェネツィアは埋立地で農業がほぼ不可能であったため、都市の建設当初から、住民は生きるために食料調達を目的とした商業を展開した。周辺の魚や近郊の沿岸地帯に設けた塩田で採れる塩と内陸の穀物等を交換する河川交易から、海上

へ交易の場を拡大していった。イタリア半島の東岸は地形の影響で良港が少ないことから、入り江や島が点在する対岸のダルマティア沿岸を征服しながらアドリア海を南下し、地中海へ進出した。地中海では、当時の先進地域である東地中海域(東ローマ帝国やイスラーム世界)と、後進地域のアルプス以北(ヨーロッパ)を結ぶ中継交易を展開し、十六世紀に至るまでヨーロッパ商業の覇権を維持したのである。

十九世紀にイタリア本土と長い鉄橋(リベルタ橋)で結ばれるまで、「水上都市」ヴェネツィアへのアクセスは船に限られ、都市の正面玄関はサン・マルコの船着き場であった。大通りに該当するのは、大運河(Canal Grande)である。かつて移動は主に水路が用いられたが、今では多くの運河が埋め立てられて街路となっている。それでも、水路は今でも自動車が入れないヴェネツィアでは最も効率の良い移動と輸送の手段である。大量の荷物を運ぶには水路が最も効率が良いことには変わりない。早朝には、各種の運搬船やゴミ収集船、郵便船、建材を乗せたごつい船、昼間は観光客を満載した水上バス、水上タクシー、観光ゴンドラが盛んに行き来する光景を目にすることができる。

ヴェネツィアの街路は概して狭く、地盤沈下によって建物の壁が街路に向かって傾いている場合もあるが、面白いのは、同じ街路でも様々な名称がついていることである。イタリア



ヴェネツィア、効率的な移動・輸送手段の水路

の都市では、一般に街路は *Via* を用いるが (*Via Nazionale* など)、一方で地方色豊かな名称も多く存在する。ヴェネツィアでは、水路に関しては、主要な運河は *Canale*、小運河は *rio* と呼ばれる。一方、街路は *calle* (小路)、*riva* (河岸)、*salizada* (石畳で舗装された道で、主要街路)、*rio terra* (小運河沿いの道)、*fondamenta* (比較的新しい運河に沿った道)、*ruga* (路地を意味する古語)、*sottoportego* (くぐり道) など、

実に様々な名称がある。くぐり道とは、路地の入口にかけられたトンネル状の通路であり、敷地の狭いヴェネツィアで、路地の左右の住宅が二階以上を増築した結果このような形状になっている。一見してわかるように街路の名称は水路に係するものが多く、やはりヴェネツィアでは水路が交通の基本であったことが理解できる。

また街路には、往時のヴェネツィア商業の広がり象徴するような名称が多い。たとえばリアルト地区にある「カッレ・トスカーナ」は、トスカーナ地方のルッカから移住した絹織物職人や商人が多く住んだ場所である。リアルト橋から市場に向かうアーケードの一本裏手には、毛織物や絹織物の展示販売を行っていた「パラングン(ヴェネツィア方言で「比較する」という意味)通り (*Calle del parangon*)」がある。リアルトからサン・マルコ広場へ至る道は、「メルチェリア (*Merceria* 小間物通り)」と呼ばれている。また、マルヴァシア通り (*Calle Malvasia*、マルヴァシアとは、クレタで生産される甘くアルコール度数の高いブドウ酒)、ムーア人広場 (*Campo dei mont*) など、東地中海地域との商業に関わる地名も残されている。

ヴェネツィアは、都市の成立当時から生きるために交易を生業とし、異国での取引を活発に行う一方で、自らも異教徒や外国人を寛容に受け入れた。例えばヴェネツィアを訪れる

外国人は、主に出身地ごとに宿泊施設を提供され、そこに滞在して商取引を行った。こうした施設はヴェネツィアではフォンダコ (fondaco) と呼ばれ、ヴェネツィア経済の中心地であったリアルト橋のもとに位置するドイツ人商館 (Fondaco dei Tedeschi)、現中央郵便局) や、オスマン帝国から訪れるムスリム商人が滞在したトルコ人商館 (Fondaco dei Turchi、現自然史博物館) が有名である。実はこのフォンダコという名称は、「隊商宿」を表すアラビア語フンドウクに由来し、建物の内部構造もイスラーム世界の隊商宿によく似ている。イスラーム世界を訪れたヴェネツィア商人は、現地でこのフンドウクに滞在して取引をおこない、その名称と優れた機能を自身の故郷に持ち帰って活用したのである。

また大運河(あるいは中小の水路)に面して立ち並ぶ貴族の館は、家 (casa) が訛って ca' と呼ばれている (ca' Barbarigo Ⅱバルバリゴ館など)。これらは商取引と社交および家庭生活が一体となった機能を持つ商館であり、その内部構造もまた、おそらくイスラーム地域の商業施設の影響を受けている。水に面した一階部分は、通常船が着く出入り口および荷物の倉庫となっており、二階部分に商取引および社交の場となる大広間があり、同時に二階・三階は家庭生活が営まれる場でもあった。

商館では、オープンエアの中庭に内階段がつけられている

ことも多いが、これもイスラーム世界の隊商宿ないしは商業施設に倣ったものである。前述のドイツ人商館やサン・マルコ広場近くのスキアヴェオーニ河岸に建つ最高級ホテル・ダニエリ(かつてダンドロ館とよばれた十四世紀建設の商館)、現在フランケッティ美術館となっている、リアルト橋近くのカ・ドーロ(黄金の館)などで見ることができ、街路からのアクセスは、大抵薄暗くて狭い(そして猫や犬の落し物が多い)路地を通ることになるが、かつてこうした路地は基本的に裏道であり、商館へのアクセスは水路が基本であったことを思い出せばよい。ヴェネツィアでは、歩くだけではなく、是非手軽な水上バスでの移動も体験してほしい。かつてヨーロッパとイスラーム世界を結んだ、水上都市ヴェネツィアの本来の姿に出会うことができるだろう。

参考文献

齊藤寛海・山辺規子・藤内哲也編『イタリア都市社会史入門』昭和堂

亀長洋子『イタリアの中世都市』(世界史リブレット106)

山川出版社

齊藤寛海『中世後期イタリアの商業と都市』知泉書館

ルカ・コルフェライ(中山悦子訳)『図説ヴェネツィア

- 「水の都」歴史散歩』河出書房新社
- 陣内秀信『ヴェネツィア 水上の迷宮都市』講談社現代新書
- 陣内秀信『イタリア海洋都市の精神』（興亡の世界史8）講談社
- 陣内秀信『イタリア小さなまちの底力』講談社＋アルファ文庫
- 『週刊ユネスコ世界遺産 No.2 ヴェネツィアとその潟』講談社
- マクニール（清水廣一郎訳）『ヴェネツィア 東西ヨーロッパのかなめ』講談社学術文庫
- アルヴィーゼ・ゾルジ（金原、松下、米倉訳）『ヴェネツィア歴史図鑑』東洋書林
- 馬場康雄、奥島孝康編『イタリアの社会…遅れて来た「豊かな社会」の実像』早稲田大学出版部
- 北村・伊藤編著『近代イタリアの歴史』ミネルヴァ書房
- 北原敦編『イタリア史』（新版世界各国史15）山川出版社
- 島村奈津『スローシティ…世界の均質化と闘うイタリアの小さな町』光文社新書
- 井上ひさし『ボローニャ紀行』文春文庫

いかめしく、とことんストレスフリーを求める 整頓魔ドイツ

豊田洋美

■講演者……豊田洋美（フェリス女学院大学非常勤講

師）

■司 会……林 史樹（本学アジア言語学科教授）

はじめに

ドイツに関して、一般的に想起されるものは何であろうか。往々にして「堅牢」「頑丈」「武骨」「重厚」「ゴツイ」といったイメージが多かれ少なかれあるように思われる。そしてたしかにそのイメージは決定的外れではなさそうだ。ただ、イメージはあくまでイメージである。では、実際に、ドイツ人の会話や日常生活の中で頻繁に聞かれ体現されている言葉から具体性を追求してみたい。

そのような言葉の一つに、Ordnung（オールドマング）という名詞がある。英語なら order にあたり、要するに「秩序」「整然」としていること、またその状態「規律」を表す名詞で

ある。そこから考えると、先にあげたドイツ・イメージがさらに広がりをもたせられるかもしれない。例えば、「四角四面」「規則一辺倒」「融通がきかない」「とつつぎにくい」「息が詰まって肩がこりそう」……。何やらどうも少々ネガティブなイメージばかりが一人歩きしてしまいそうだが、極力中立的に、Ordnung が実際の生活のなかにどのように表れているかをこれから見ていきたい。

公的空間との Ordnung

まずは現実モノを秩序づけ、整理整頓するという場面から見ていきたい。

公的な空間、例えば会社やオフィスといった場所においては、書類の整理は最重要ポイントの一つといつてよいだろう。いかに分かりやすく書類を整理・保存し、管理するかが大切になってくるわけだが、その際に活躍するのがファイル、ド



講演する豊田先生

イツ語でいうところのOrderer(オルドナー)なのだが、これは勿論、Ordnungの派生語、動詞のordnen(オルドネン)から来ている。

この動詞ordnenの意味を一言でいうと、「とことん整理整頓して片付け秩序付ける」となる。その整理整頓を担うのがOrdererである。ちなみに、Orderには書類整理用ファイル、という意味のほか人間に関しても、「(集会・祭典などの)(会場)整理係、(行進などの)リーダー」という意味もある。まさに、徹底して(gründlich)「秩序をもたらしべき役割を担ったもの」なのだ。

そしてまた、そのドイツのファイル、オルドナーについて紹介すると、日本の一般的なファイルよりもさらに書類を整

理整頓し、管理・収納するためのさまざまな工夫がなされている。書類を綴じるレバーの構造にせよ、また、オルドナーを棚から取り出しやすくするための、背表紙部分の穴の存在にせよ、ことごとく無駄を無くして効率性を追求、つまり混乱を避けるための配慮や努力がなされている。最近では日本のファイルも、以前に比べると随分使いやすいものも出回ってはきているようだが、ドイツのこのオルドナー、発明されたのは一〇〇年以上も前の一八九三年のことだそうである。

またそのオルドナーによって効率化がはかられたドイツのオフィスは、仕事中は多少別としても、仕事の後、帰宅する時には机の上にはほとんど余計なものを置かない、というのが標準的な光景のようである。なるほどこれなら、翌日も仕事が始めやすく、作業効率も上がる上に、ゴチャゴチャした光景が目に入ってこない、つまり視覚からの情報もスッキリ(整理整頓、オルドニング!)していれば、余分なストレスの軽減効果にもつながるだろう。

プライベート空間におけるOrdnung

次に、プライベート空間、まずは、学生下宿における実例から検証を始めたい。

かつて、ドイツ南西部の大学町で、住人の大半は学生というアパートに住んでいたことがある。ここにはキッチンやバ

スルームが完備した部屋は一つもなく、自分の部屋にあるのは(ベッドや机に本棚と、ちよつとした収納家具のほかには)洗面台のみ、というシンプルさ。各フロアにそれぞれ共同のキッチンとシャワールーム、そしてトイレがあるだけである。こういった設備を十数人が共同使用するとなれば、時には不快な思いをすることも無くはないだろう、と思っていたが、予想に反して、そういった不快感ほとんど感じなかったのである。総じて「清潔さ」という秩序、オールドヌングを保とうという姿勢が貫かれていたように思われる。そうすると今度は、気が付かないうちに自分が他の住人に不快感を与えていないかどうか気がなつて少し疲れてくるほどだった。

そのような毎日のなか、珍しいことに、キッチンの調理台に、吹きこぼれの跡が残っていたことがあった。それを見たときは、不快感を覚えるどころか、むしろ逆に人間くささを感じてホッとしたような気分になつた。大体、学生下宿なんて、そんなにいつもきれいにばかりもしていられない、という思いもあった。

が、その後二〜三日した時のことである。共同キッチンの壁に元々貼つてあった「キッチンをきれいに(Mach die Küche sauber)」という貼り紙の文句の下にさらにダメ押しの下線が引いてあった。その下線がまた、強調効果抜群の目立つ色である。(ピンクだったと記憶している。)住人たちの誰

の所業かは知る由もなかったが、そういえば共同キッチンでの調理を終えた後、彼(女)らが調理台に飛び散つた汚れを実に丁寧に拭き取る姿が思い出されてくる。いや、丁寧に、というよりは、大仰に言うなら、仇敵に立ち向かうかのような集中した面持ちで掃除していた、といえようか。今にして思えば、「清潔さ」というオールドヌングを守ることへの執念のようなものを垣間見た経験だった。

さて、次は学生下宿ならぬ一般家庭での実例を見てみたい。これは筆者が実際にホームステイ、というか間借りして住んだドイツ人家庭の話である。

第一例は、ミュンヘンのE家でのこと。E家に到着して部屋に案内されてから、家庭内のさまざまな物の置き場や設備の説明を受けたのだが、正直いって、それ以前に住んでいた、先の学生下宿の時よりもさらに内心、緊張した。キッチンでの食器や、シートその他のリネンやタオル類の保管の仕方は、まさにピシットと「隙が無い」という整えられ方だったのである。また、掃除の仕方も、時間と手間を効率よく配分してあるらしく、毎日順繰りに時間と場所を区切つて掃除していたようである。掃除にかける時間にも労力・方法にもオールドヌングが確立しているといわざるをえなかった。

さらにその数年後、再びドイツ人家庭に厄介になることになり、今度は筆者と四〜五歳しか年の違わない独身女性B嬢

のフラットに間借りした。ミュンヘンでの家に比べると、こちらは多少カジュアルに暮らしているようにも思えたが、家の中のどこに何がどのくらいの量で収納されているのかは誰が見ても明らかであり、混乱というものは存在していなかった。比較的、若い世代の住まいでもオールドヌングは徹底していたわけだ。

その他、間借人をおいているわけではない一般家庭においても、まず大抵は家の中の掃除が行き届き、つねに整頓され、スツキリとした空間が保たれているようである。

全般的にいつて、このように、つねにきつちりと整理整頓してオールドヌングを守るということに、彼らが特別に神経をすり減らしていたようには見受けられなかった。ごく自然に「ただ自分が居心地よく過ごすために」整理整頓を心がけていた、という風情であった。

なかには、例外的に、散らかったカオス的空間で暮らしている人も皆無ではないと思われるけれども、今のところそういう実例を目にしたことはない。

「万事OK」

今まで、このオールドヌングという言葉・概念が実際の生活空間のなかでいかに体現されているかについてみてきたわけだが、この言葉は、実際の言い回しとしても、日常会話のな

かで頻繁に登場する。それは“Alles in Ordnung.”（「万事OK」）という言い方である。Allesが全てという意味で、つまりこの表現をあえて直訳すれば「全てが秩序のなかにおさまっている」となる。この表現の仕方に、オールドヌングというものがいかに重要視されているかが表れているととらえたら、見方ががちすぎだろうか。

また、「万事何の支障もなく順調だ」という場合、さらに仰々しく“Alles ist in schöner (bester) Ordnung.”と表現する。オールドヌングという言葉を、形容詞 schön（美しい、素敵な）あるいは gut（良い）の最上級を用いて修飾しているのだ。そして最上級など持ち出さないまでも、“In Ordnung.”（「よろしい、承知した」という表現もよく耳にするが、直訳するなら、「秩序のなかにおさまっている」ということである。要するに、「秩序のなかにあること、秩序づいていること」が「良きこと」、「あるべき（正常な）状態」だという価値観とされているということなのだろう。

ところで、この Ordnungsliebe（Liebe は愛、つまりオールドヌングスリーベとは「几帳面」「整頓好き」の意）は、つまるところ、オールドヌングが自己目的化してしまった、オールドヌングのためのオールドヌング、なのだろうか？

ゲミュートリヒカイト (Gemütlichkeit) を求めて

さて、ここで一度オールドヌングとは別の言葉について考えてみたい。それはやはり日常よく耳にする言葉で「ゲミュートリヒカイト (Gemütlichkeit)」という語である。直訳できる日本語はほとんど見当たらない、翻訳し難い言葉の一つであるが、あえて言うなら「くつろいで安心できる心地よさ」とでも言い表すことになるだろうか。筆者としては、この語を「ストレスフリーで安心していられる状態」と表現したい。

このゲミュートリヒカイトという語は、先に述べてきた「四角四面で秩序一点ばり」のオールドヌングとは一見、無関係あるいは真逆であるかのような印象を与えるかもしれない。だが、この両者、実は切っても切れないつながり、コインの裏表のような関係にあるのではないだろうか。というのは、ゲミュートリヒカイトを追求するには、ある種の条件が必要になると考えられるからである。その条件の一つが、オールドヌングなのではないかと考えられるのだ。

ゲミュートリヒカイトとはストレスフリーな状態ではないか、と述べたが、例えば会社や仕事において、ストレスゼロというのは、まず考えられないだろう。では、そのなかでいかにストレスを軽減するか。そのためには、仕事で可能な限り余計な手間ひまをかけないようにすることも一つの手段であり、そのためにはオールドヌングと秩序の維持・管理が不可

欠である。もしもカオス状態のなかで仕事、などといったらストレスは増すばかりだろう。だから少しでもストレスを少なくする、あるいは回避しようと思えばために、ドイツ人はとことんオールドヌングを重んじるのだ、と解釈できるのではないだろうか。オールドヌングとは、最終的にはゲミュートリヒカイトをとことん求めるがゆえの重要な手段になっているのだと考えると納得がいくのである。

家庭内でのゲミュートリヒカイトにしても、モノがあふれかえって乱雑に散らかした状態では、ストレスフリー状態などとても覚束ない。掃除を徹底してとことん家の中をきれいに保つことによって、ひたすらゲミュートリヒカイトを求めらるのだ。

ゲミュートリヒカイトの追求といえば、閉店法 (Zaden-schlussgesetz, ラーデンシュルスゲゼツ) も、時間の整理と家庭内ゲミュートリヒカイトには一役買ったといえよう。この法律は、週の営業時間の上限を定め、その範囲内であれば営業してよい、という法律である。この規定により、かつては平日は午後六時から六時半、土曜日は長くて午後四時までしか一般商店が営業しておらず、日曜日は全面的にクローズ、というのが普通だった。(飲食店や駅の売店などは例外。)筆者も当初はこの法律に驚き、戸惑っていたのだが、気が付くと、夕方以降の時間が有効に使えるようになっていた。

つまり、時間的オールドマングがつけやすくなっていたのである。これが一般家庭なら、家族の団欒の時間も持ちやすくなることだろう。買い物には不便な面もあった閉店法だが、一方では団欒というゲミュートリヒカイトの実現には役立っていた面がたしかにあったようである。(現在ではこの法律はずいぶん緩和され、大規模店舗の営業時間は延長傾向にあるが、個人商店などはその限りではない。)

また、ゲミュートリヒカイトの追求、といえば、ドイツ人が重視する休暇(Unterbau)の過ごし方にも、徹底してゲミュートリヒカイトを求める傾向が現れているようだ。個人差はあっても、二〜三週間の休暇の間、とにかくひたすらのおんびりする、という人が多数派のようである。どうやら心血注いでストレスフリーな状態を求めているらしい。

まとめ

最後になったが、ドイツのことわざを一つ紹介しておきたい。“Ordnung ist das halbe Leben.”(オールドマング イストダス ハルベ レーベン)、というものである。意味するところは「人生・生活の半分は秩序だ。(秩序・整理がしっかりしていれば人生・生活は大丈夫である。そうしたらあとは人生を楽しむことが出来る)」。人生を楽しむというのは、これはきつと、とにかくストレスから解放されて、とことんゲミュ

トリヒカイトに浸りきる、という意味なのではないだろうか。オールドマング重視という点、たしかにいかめしく、しかつめらしい。しかしながら、いかめしいの一点張りでもない。秩序付けるのも徹底的だが、ゲミュートリヒカイトの追求も、徹底的である。つまるところ、とことんゲミュートリヒカイトを求めるがゆえにオールドマングを徹底させているのではないかと思われるのではないのである。

参考文献

- 犬養道子『ヨーロッパの心』(岩波新書、一九九一年)
- 小塩節『ドイツざつくばらん』(日本放送出版協会、一九八九年)
- 小塩節『ドイツ語とドイツ人気質』(講談社学術文庫、一九八八年)
- 小塩節『ドイツの都市と生活文化』(講談社学術文庫、一九九三年)
- 熊谷徹『住まなきやわからないドイツ』(新潮社、二〇〇三年)
- 熊谷徹『びっくり先進国ドイツ』(新潮社、二〇〇七年)
- 『独和大辞典』(小学館)



シリーズ全回ご協力いただいた林先生



会場風景

キーワード

- ① Ordnung (オールドマンング)
- ② Gründlichkeit (グリュントリヒカイト)/gründlich (グリュントリヒ)
- ③ Alles in Ordnung (アレス イン オールドマンング)
- ④ Alles ist in schönster (besten) Ordnung. (アレス イ ト ダス ハルベ レーベン)
- ⑤ Ordnungsliebe (オールドマンングスリーベ)
- ⑥ Gemütlichkeit (ゲミュートリヒカイト)
- ⑦ Urlaub (ヴァラウプ)
- ⑧ Ordnung ist das halbe Leben. (オールドマンング イス ト ダス ハルベ レーベン)